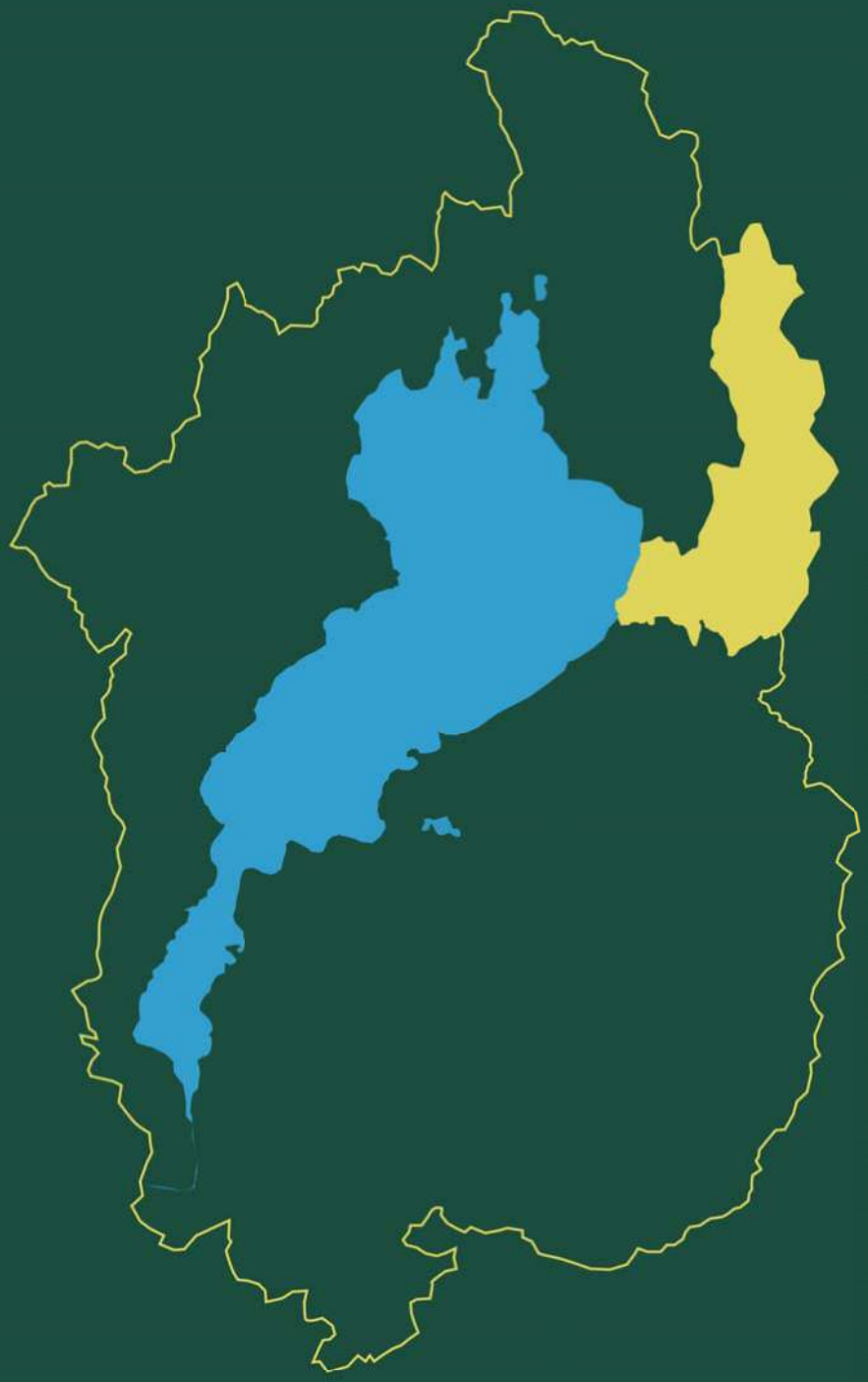
滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅲ　米原市編２

縄文人のアートとキッチン



主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会　　後援：滋賀県・米原市教育委員会

滋賀県 埋蔵文化財 地域展 Ⅲ

縄文人のアートとキッチン

ART and KITCHEN, created by JOMON cultures.

【目次】

プロローグ／今回の展示対象・・・・1
琵琶湖のほとりの遺跡・・・・・・・2
　入江内湖遺跡と磯山城遺跡
　筑摩佃遺跡
　六反田遺跡
伊吹山・霊仙山とその麓の遺跡・・・4
　起し又遺跡
　杉沢遺跡
　番の面遺跡
縄文人のアート・・・・・・・・・・7
　縄文人をひきたてたアクセサリー
　うつわを飾った縄文アーチスト
　あざやかに彩るウルシの達人
　祈りかなえる土偶のヒミツ
縄文人のキッチン・・・・・・・・・11
　アーチストたちのごちそう
　アーチストたちのキッチン
　縄文人のお取りよせ
エピローグ／
　縄文人のアートとキッチン・・・13
参考文献・出典・・・・・・・・・・13

【QR コードの使い方】
このパンフレットに掲載された QR コードを読み取ると、米原市教育委員会ならびに公益財団法人滋賀県文化財保護協会のホームページに掲載された関連記事にアクセスできます。自由研究などの調べ学習などにもご活用ください。

●本展の対象地――米原市周辺とは

滋賀県東部には伊吹山地と鈴鹿山脈が連なり、これが東西日本を区切る大きな壁になっています。本展の対象地――米原市周辺とは、その僅(わず)かな切れ目に位置する地域であり、東西日本の接点として、また東西日本を結ぶ大動脈の出入り口として息づいてきました。

市東部に聳(そび)える伊吹山(いぶきやま)や霊仙山(りょうせんざん)には豊かな水源が育まれ、そこで生まれた河川は大地を潤(うるお)しながら広大な琵琶湖へと流れ出ています。県最高峰を含む山々の頂きから日本一の大きさを誇(ほこ)る琵琶湖へ至るバラエティに富んだ環境は、多様な資源を育んできました。

このような米原市周辺には、滋賀県や関西地方を代表する縄文遺跡が数多く生み出されてきました。

●本展の対象時期――縄文時代とは

縄文時代とは、現代への扉(とびら)が開かれた時代です。

縄文時代より以前の旧石器時代は、気温の低い氷河期に相当し、人びとは大型の獣(けもの)などを追いかけながら移動を続ける生活をしていました。

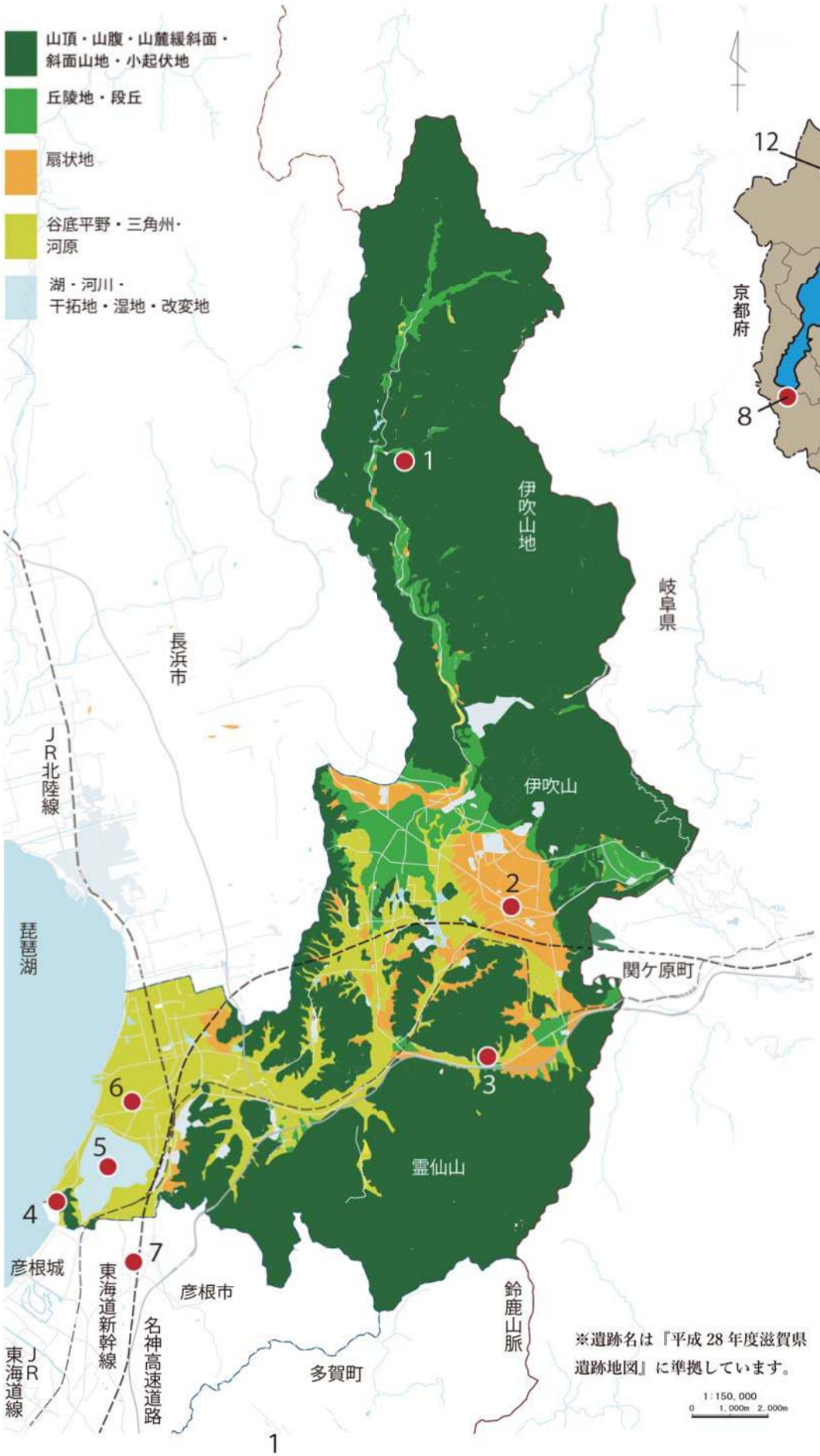
移動の多い生活では、道具も一緒に持ち歩く必要がありました。重荷はつらいので、道具はなるべく軽い方がよく、その数も少なくする必要がありました。

およそ１万数千年前に氷河期が終わり、暖(あたた)かい時代になると、多様な資源を育む森が広がっていきました。豊かな森を利用しはじめた人々は、獲物(えもの)を追いかけて移動する生活をやめ、定住生活を採用していきました。現代への扉が開かれた時代―縄文時代の始まりです。もはや道具の重さや数を気にする必要はありません。

縄文時代の始まりとは、多種多様なモノづくりの時代――アートに満ちた時代の幕(まくあ)開けでもありました。

本展では、米原市周辺の縄文時代を主な対象とし、琵琶湖のほとりに形成された遺跡、伊吹山・霊仙山とその麓(ふもと)に形成された遺跡を紹介します。そして、関連遺跡の調査成果もおりまぜながら、縄文人のモノづくりと、それを支えた資源利用のありさまを、アートとキッチンという形でとらえなおしてみます。

プロローグ／今回の展示対象



【本展で紹介する遺跡】

米原市

- ●1　起し又遺跡
- ●2　杉沢遺跡
- ●3　番の面遺跡
- ●4　磯山城遺跡
- ●5　入江内湖遺跡
- ●6　筑摩佃遺跡

彦根市

- ●7　六反田遺跡

大津市

- ●8　粟津湖底遺跡

近江八幡市

- ●9　弁天島遺跡
- ●10　竜ケ崎A遺跡

東近江市

- ●11　相谷熊原遺跡

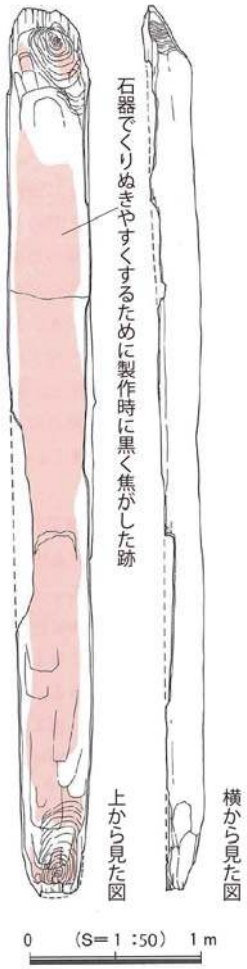
高島市

- ●12　弘川佃遺跡

入江内湖遺跡と磯山城遺跡

米原市入江地先（1頁地図の●5）　米原市磯地先（1頁地図の●4）

★01 入江内湖遺跡（手前）と磯山城遺跡（奥）



★02　2号丸木舟

★03　釣針

★04　漆塗り容器　漆を塗った木製容器としては日本最古級

★05　埋葬人骨出土状況

入江内湖遺跡はJR米原駅の西側に広がる遺跡で、かつては波静かな入江状の地形にあった遺跡だと考えられます。

平成14～16年度（2002～2004年度）に実施した国道8号米原バイパス建設工事に伴う発掘調査で、縄文時代の丸木舟5艘（★02ほか）や木製漆塗り容器（★04）などが出土しました。これらは全国的に見ても古い段階のものです。

また、赤漆で文様を描いた土器（★36）、腕輪や石製の耳飾りのほか（★23･26）、釣針（★03）やマグロの骨（★64）、土器の中で焦げてしまった球根（★57）など、縄文人のアートとキッチンの様子を示す資料もたくさん出土しています。

磯山城遺跡は琵琶湖に面した山の斜面の遺跡で、入江内湖遺跡のすぐ隣の遺跡です。昭和59年（1984年）の調査では、およそ8,500～7,000年前の人骨（★05）やたくさんの土器・石器が発掘されました。

筑摩佃遺跡

米原市朝妻筑摩（1 頁地図の●6）

およそ 5,000 ～ 4,000 年前の縄文時代中期の遺物が大量に出土しました。土器には北陸地方のものが多く含まれ、また日本海の隠岐島や長野県から運ばれてきた黒曜石なども出土しています。

最も注目される遺物は土偶です（★06）。土偶とは、縄文人の不安を和らげるために作られていた祈りの道具です。右の土偶は、頭部の上側が平らに作られていることから河童型土偶と呼ばれるものに分類されます。これとよく似た形状のものは、富山県などの北陸地方を中心に見つかっており、これらの地域との関係がうかがえます。

★06　土偶
正面は丸顔ですが、頭の上は平らで皿状になっています。
A・B・Cには粘土がはがれた痕が残っています

六反田遺跡

彦根市宮田町（1 頁地図の●7）

入江内湖遺跡に面する谷の奥の扇状地に位置します。平成 20 年（2008 年）の発掘調査で、およそ 3,500 ～ 2,500 年前の縄文時代後・晩期の大規模食料貯蔵穴群（★07･11）や、後期末の土偶（★10）が発見されました。

貯蔵穴からは、縄文人の主食だった木の実（オニグルミ・コナラ・クリ・ツブラジイ・イチイガシ・アカガシ・シラカシなど）が出土しています。

また、漆の貯蔵容器（★09）のほか、赤色顔料の塊やそれをすりつぶした石皿、接着剤としての天然アスファルト、ヒスイ（★62）など、アートに関連する多様な遺物が出土しました。また赤い水銀朱が付着した土器なども見つかっています。

★07　新幹線沿いで発見された 3,500 年前の貯蔵穴群。西日本の縄文人はしばしば湧水地点などに穴を掘り、収穫した木の実を水漬けで貯蔵し、食料供給を安定化させていました。定住生活を支える工夫の１つです。

★08
有舌尖頭器

★09　漆貯蔵容器

★10　土偶

★11　貯蔵穴　直径 2 m、深さ 0.5mを超えていました

伊吹山・霊仙山とその麓の遺跡

起し又遺跡

米原市曲谷（1頁地図の●1）

★12　平成7年度の調査風景

★13　1号住居跡

★14　2号住居跡出土土器　およそ4,000年前のもの

伊吹山・霊仙山とその麓では20か所以上の縄文遺跡が見つかっています。起し又遺跡は、姉川の支流の1つである起し又川沿いの遺跡で、標高430m前後の山中にあります。団体営ほ場整備事業に伴う平成6～8年の発掘調査などにより、縄文時代のくらしの跡が見つかりました。

これまでの調査で、およそ4,000年前（縄文時代中期末～後期初め）の竪穴住居5棟などが発掘され(★13ほか)、たくさんの土器も出土しました。石鏃は少ないのですが、木を伐るための磨製石斧や木の実などをすりつぶすための磨石、漁網に付ける石錘などが目立っています。

土器のデザインや文様などは、関西地方の例と似たものが多いものの、東海地方の影響も強く受けています（★14）。また、長野県などから運ばれてきた可能性のある土器も出土しているので、中部高地から奥美濃を経由し、伊吹山北側の尾根道へ通じる「山」のルートの存在と、このルートをつかった交流の関係が推定されています。

杉沢遺跡

米原市杉沢（1 頁地図の●2）

★15　調査風景

杉沢遺跡は、伊吹山南麓の扇状地に広がっていた縄文時代のムラの１つです。これまでたくさんの土器や石器が採集され、保管されてきました。

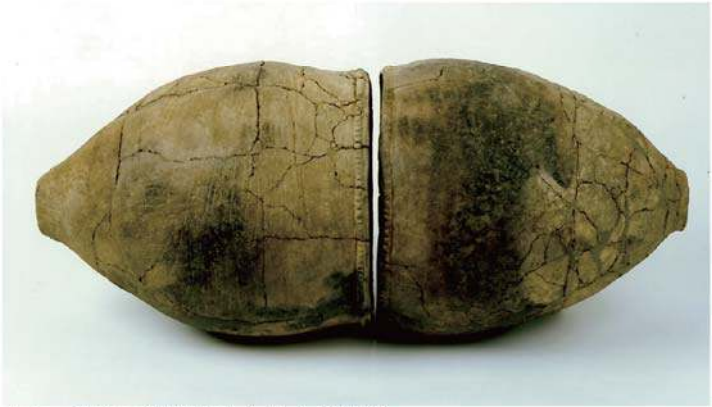
この遺跡から住居跡はまだ見つかっていませんが、土器を棺として使っていたお墓――土器棺墓がたくさん見つかっています（★16）。

土器棺墓には、２つの土器をカプセルのように組み合わせてお棺にしたものや（★17）、１つの土器をお棺にし、別の土器の破片で蓋をしたものなどがあります。

このような方法でお墓を作る風習は、およそ2,500 年前（縄文時代晩期）の滋賀県北部や岐阜、福井の両県を中心に現れたと考えられており、杉沢遺跡はその分布の中心に位置しています。

杉沢遺跡の土器棺に使われていた土器は、東海地方でよくみられるデザイン・作り方のものが多くあります。関ケ原につながる谷筋を介し、東海地方とモノや情報をやり取りする中で、土器棺墓をとりまく文化は生まれ、育まれたようです。

★16　土器棺墓の出土状況



★17　調査で掘り出された土器棺墓
２つの土器を組み合わせて棺にしていました。

番の面遺跡

米原市梓河内・柏原（１頁地図の●３）

★18　チャートで製作された石鏃（一部）　赤色のほか、青色、黄色、白色、透明など色とりどりのものがあります。

番の面遺跡は、霊仙山の麓の台地上にある遺跡で、米原市梓河内・柏原に所在します。この地域は東海地方とのまさに境目・接点にあたり、それだけに、東日本の風習や情報に接しやすい地域にあった遺跡だといえます。この遺跡の面白いところは、色とりどりの石器が発見されたところにあります（★18）。

縄文時代は、石器時代に相当します。生活必需品である石鏃やナイフの材料としては、チャートという石のほかに、サヌカイトと呼ばれる黒っぽい石などを使っていました。

サヌカイトはどこでも見つかる石ではありません。大阪府と奈良県の境の二上山などに産地があり、そこから各地へ運び出されていました。滋賀県内でも、彦根市より南側の縄文遺跡でチャートはあまり使われておらず、大阪方面から運ばれてきた黒っぽいサヌカイトがたくさん出土しています。

一方、東海地方の縄文遺跡はその逆でした。黒っぽいサヌカイトはあまり出土せず、チャートがたくさん出土しています。

米原市をはじめとする湖北地域の縄文遺跡の傾向も東海地方と同様です。石器の材料から見た場合、米原市や湖北地域は東海地方の経済流通圏にあった可能性が指摘できます。

ちなみに、番の面遺跡の石器はほとんど全てがチャートです。遺跡のすぐ近くにチャートの岩盤が露出しており、材料として手に入れやすかったからでもありますが、カラフルなチャートの石器は、米原市周辺の地域と東海地方の経済流通圏の歴史を物語ってくれる資料としても位置付けられそうです。

縄文人のアート

縄文人をひきたてたアクセサリー

★19　赤漆をぬった竪櫛（たてぐし）
櫛の歯の部分は抜けてしまい、
飾りの部分だけが残っています。

★20 シカの骨で作った
笄（こうがい）。結った
髷（まげ）にさします。

★21　琵琶湖のほとりの縄文人の装い
米原市入江内湖遺跡や大津市粟津湖底遺跡から出土したアクセサリーはこのように縄文人をひきたてていたと考えられます。

★22　貝塚から出土した縄文人骨

★23　赤漆を塗った土製耳飾り（左）
と石で作った耳飾り（右）

★24　犬歯製ペンダントと琥珀の玉

★25　貝殼で作った腕輪の破片

★26　ヤシの実？で作った腕輪

★19・20・22・23（左）・24・25：粟津湖底遺跡
★23（右）・26：入江内湖遺跡

縄文人とは、狩りや漁労（ぎょろう）、植物採集をしながら暮らしていた人々です。現代人の私たちが描くそのイメージは、その日暮らしをする「みすぼらしい姿の人々」というものになりがちです。

しかし、発掘調査によって復元されつつある実際の姿は、私たちのその思い込みを裏切るものです。縄文遺跡には、アートに満ちあふれた縄文人たちのくらしが残されていました。

まず強調したいのは、縄文人をひきたてていたアクセサリーの存在です。結い上げた髪を飾るための櫛（くし）（★19）や笄（こうがい）（★20）、今でいうピアス（★23）が見つかっています。ペンダントや（★24）やブレスレット（★25・26）もあります。

ナチュラルな素材をたくみに使って、シンプルに自らを引き立てるアーチスト。それが縄文人の正体です。

うつわを飾った縄文アーチスト

縄文人は、世界に先駆けて土器づくりを本格化させた人々です。その基本的な作り方は★28のようなもので、①土をこねて粘土のひもを作り、②ひもを巻き上げて器の形を作り出し、③文様をつけ、④焼きあげる、といった手順になります。

縄文土器を特徴づける美しい文様のヒミツは、次のように謎解きされています。たとえば、土器★30の（A）の小さな点々は、棒の先を押し当ててつけています。(B) の爪形をした文様は、丸みのあるヘラを左に少し押し当てては右へと引いていくことでつけています。(C) の縄目文様は、丁寧に撚った縄をコロコロと転がしてつけています。

実際にやってみるとわかりますが、どれも結構面倒くさい！土器づくりの謎解きからは、美しい効果のために手間ひまを惜しんでいなかったこと、くらしにもそれだけの余裕があったことなどがわかってきます。

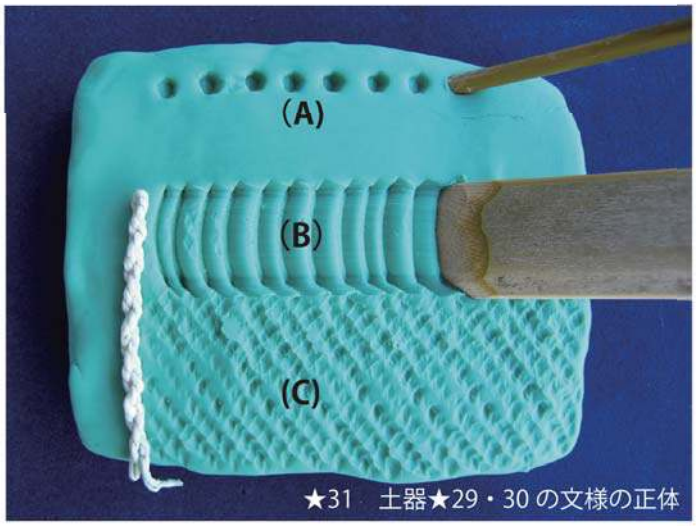
★27　東海地方から持ち込まれた土器　粟津湖底遺跡

せっかく美しく飾った★27や★28の土器にも「おこげ」や「ふきこぼれ」の跡がしっかりついています。

★29　琵琶湖のほとりの縄文人が製作した土器　粟津湖底遺跡

★28　縄文人の土器づくり

★30　土器★29の拡大　粟津湖底遺跡



★31　土器★29・30の文様の正体

あざやかに彩るウルシの達人

★32　漆塗り容器　入江内湖遺跡
容器の口径は 13.8 ㎝、
高さ 10.5 ㎝です。

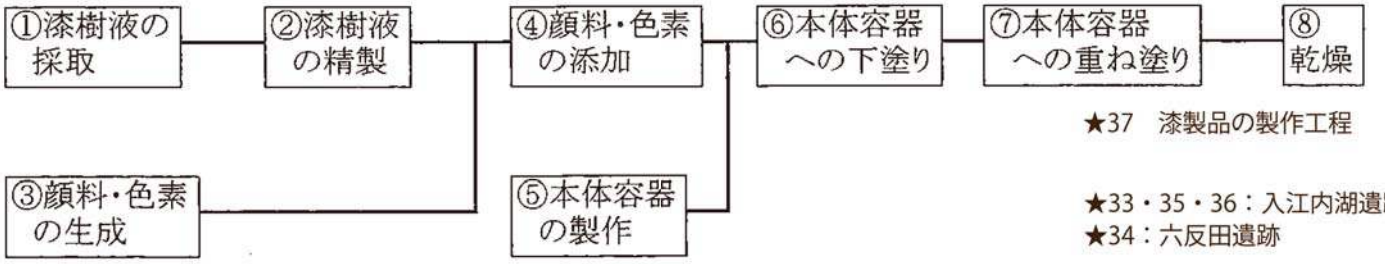
口縁の向き合った 2 カ所に 1 つずつ小さな穴があいています。

★33　漆樹液が付着した土器

★34　赤色の顔料

★35　漆塗り容器

★36　赤漆で文様を描いた土器



★37　漆製品の製作工程

★33・35・36：入江内湖遺跡
★34：六反田遺跡

縄文人は、美しい効果のために手間ひまを惜しんでいなかった――このことは、遺跡から発見される漆製品からも見出せそうです。

米原市入江内湖遺跡で発見された漆塗りの容器は、およそ 5,500 年前の縄文時代前期前葉~中葉と呼ばれる時期のもので、漆で飾った木製容器としては日本最古級のものです。

特に★32 は、ほぼ完全な形で見つかった逸品です。トチノキの材を石器でくりぬいて、器を作り出し、黒漆を塗ったあと、赤い顔料（ベンガラ）を混ぜた漆を内側の縁や外側に塗り重ねています。

その複雑な工程は★37 のとおりで、とても手間ひまがかかっていることがわかります。

入江内湖遺跡にほど近い彦根市六反田遺跡では 3,000 年前頃（縄文時代後期～晩期）の漆貯蔵容器（★09）や赤色の顔料（★34 など）が見つかっており、縄文人の豊かなくらしをうらづけていたアートとその伝統のつながりが見出せます。

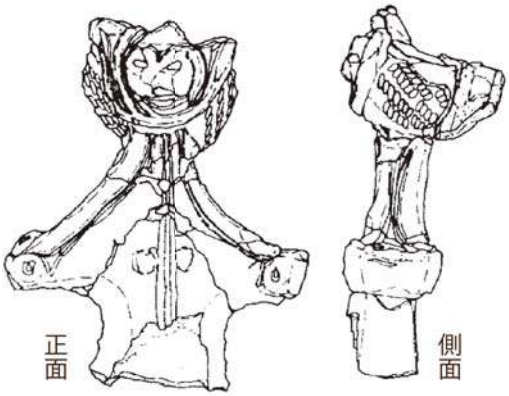
祈(いの)りかなえる土偶(どぐう)のヒミツ

★38　日本最古級の土偶　相谷熊原遺跡

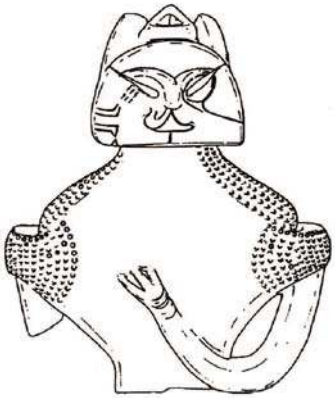
★39　土偶頭部　粟津湖底遺跡

★40　土偶頭部　粟津湖底遺跡

★41　土偶　筑摩佃遺跡



★42　土偶　富山県長山遺跡


★43　土偶　山梨県上黒駒

縄文人は、アートにかこまれた豊かなくらしをしていましたが、さまざまな危険や危機とも、日々向き合いながらくらしていました。

例えば、狩りに行ったり、魚をとりに行ったりすれば、事故にあうこともあります。また子供の出産においても、いつも安全だったわけではありません。日々の暮らしは、死と隣り合わせでもありました。

そんなくらしの不安や心配を和(やわ)らげてくれていたのが〈祈りの道具〉でした。土偶もまた、縄文人が自分たちのくらしの安全を祈り、少しでも安らかになるために作っていた縄文アートです。

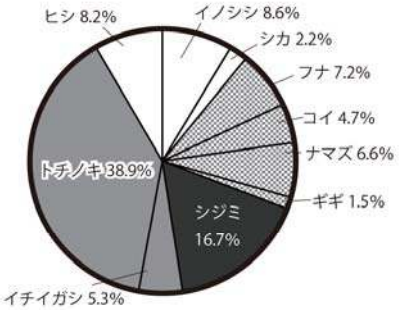
滋賀県では16例の土偶が見つかっています。米原市筑摩佃(ちくまつくだ)遺跡で発見された★41は、その代表例の1つです。丸顔ですが、頭の上側が皿のように平らに作られているので、「河童型(かっぱがた)土偶」と呼ばれています。富山県などの北陸地方を中心に出土しています（★42など）。筑摩佃遺跡からは、北陸地方の土器や、それによく似たものがたくさん出土しているので、この土偶もまた、日本海側の地域との関係の中でもたらされたものだと考えられます。

筑摩佃遺跡土偶には、もう1つヒミツがかくされています。その謎解きのためのヒントは、粘土がはがれてできたA～Cの痕跡にあります(★41)。

このうちAをよく見ると、指先の表現が見出せますので、おそらくこれは胸に置かれた左腕の先端です。となると、Bはその左腕の付け根、反対側にあるCは右腕の付け根だということになります。およそ4,500年前に作られたこの土偶の本来の姿は、Bから長い左腕を伸ばし、その手の先を右の胸（A）に置くポーズをとるものだと考えられます。

このようなポーズをとる土偶は、同じ縄文時代中期の長野県や山梨県周辺でしばしば見出されます（★43など）。筑摩佃遺跡の土偶は日本海側の地域だけでなく、実は中部高地とも深く結び付けられた祈りの道具だったといえそうです。

アーチストたちのごちそう

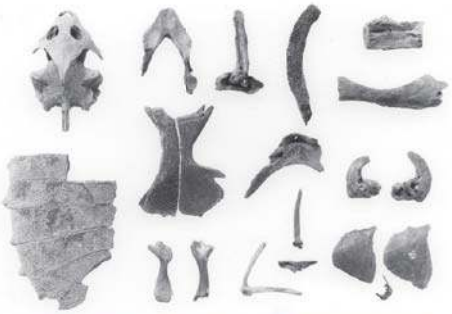


★44　縄文人のごちそう　粟津湖底遺跡

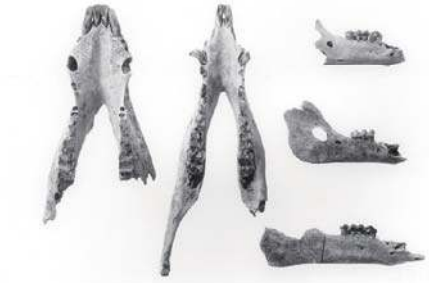
★45　木の実（コナラ属）粟津湖底遺跡

★46　木の実の大型貯蔵穴　六反田遺跡

★47　貝類　粟津湖底遺跡


★48　コイ・フナほか　粟津湖底遺跡

★49　4,000 年前の出土丸木舟の復元品


★50　イノシシ　粟津湖底遺跡

★51　クマ・サルほか　粟津湖底遺跡

★52　石鏃　粟津湖底遺跡

縄文人のアートにあふれたくらしを支えていたのは、多様な食料資源でした。

代表的な食料は木の実です。縄文人のゴミ捨て場などの分析から、ドングリ、クリ、クルミ、トチノキなどを食べていたことが分かっています(★45)。彦根市六反田（ろくたんだ）遺跡からは木の実を大量に貯蔵していた穴も見つかっています（★07・46）。このような大量貯蔵は、秋の森のめぐみをほかの季節でも利用できるようにしてくれるので、くらしの安定を生み出してくれていました。

また、湖や川の生き物も重要な食料でした。米原市入江内湖遺跡では、魚やスッポンの骨、漁につかった縄文時代の丸木舟や釣針などが発見されています（★02・03・49）。丸木舟は水上をスイスイ進む便利な乗り物です。琵琶湖の沖合や深場、あるいは遠方にある資源利用へも出かけやすくしてくれていました。

そのほか、イノシシやシカ、クマやサルといった獣（けもの）も石鏃などをつかって捕獲し、食料にしていました（★50 ～ 52）。

大津市粟津湖底（あわづこてい）遺跡第 3 貝塚の発掘調査成果をもとに、これらの食料の割合を分析したところ、イノシシやシカといった獣の割合が 1 割程度にとどまること、木の実など植物性食料が 5 割、魚・貝類が 4 割程度を占めていたことなどが分かっています（★44）。

アーチストたちのキッチン

★54 磨石（すりいし）

★55　石皿　相谷熊原遺跡

★56 石匙（いしさじ）

★57 炭化物付着土器

★58　土器

★54：相谷熊原遺跡　★56・57：入江内湖遺跡
★58：粟津湖底遺跡

縄文人のキッチンでよく使われていた道具には石皿があります（★55）。これと磨石（すりいし）（★54）を使って木の実などをすりつぶしていました。するどい刃をもつ石匙（いしさじ）（ナイフ）も大切な道具です（★56）。

土器は、人類のキッチンに革命的な変化を引き起こしてくれた道具です。土器で煮炊きをすることで細菌を減らし、保存性の向上が可能になりました。土器は、食の安全性を高めてくれたのです。

また、水と一緒に加熱することで、食料に含まれている余計な「あく」を抜き、食べにくい材料でも食べやすくすることができるようになりました。食べられる食料資源の種類や量を、土器は大幅に増やしてくれたのです。

アートに囲まれた縄文人の豊かな暮らしは、この革命的な変化を引き起こした道具―土器をつかったキッチンが支えてくれていたといえます。

縄文人のお取りよせ

縄文人は、まわりの環境を上手に利用していましたが、どうしても手に入らないものについては、遠くの地域からも手に入れていました。6頁で紹介した石器の材料――サヌカイトはその代表です。

ほかにも、米原市磯山城遺跡や彦根市六反田遺跡からは、日本海に浮かぶ隠岐島（島根県）や信州から運ばれた黒曜石（こくようせき）という石器の材料が見つかっています。また六反田遺跡からは、接着剤として東北地方の日本海側から持ち込まれたアスファルトも出土しました。

アクセサリーやその材料も、しばしば遠くから手に入れていました。米原市入江内湖遺跡の石製ピアスや六反田遺跡のヒスイは北陸地方からのお取りよせです（★61・62）。また海のある地域からは、イタボガキの貝殻で作ったブレスレットや、マグロの骨なども持ち込まれています（★63・64）。想像以上に広い範囲との流通・交換も、アートにあふれた豊かなくらしを支えてくれる重要な仕組みだったと考えられます。

★59　石鏃　粟津湖底遺跡

★60　石鏃　番の面遺跡

★61　石製ピアス　入江内湖遺跡

★62　ヒスイ
六反田遺跡

★63　貝製の腕輪　粟津湖底遺跡

★64　マグロ椎骨
入江内湖遺跡

エピローグ
縄文人のアートとキッチン

本展で対象とした縄文時代とは、移動を繰り返す生活から定住生活へと切り替えた時代であり、現代への扉を開いた時代でした。多種多様なモノを作り出して、より好ましい暮らしを生み出し、あるいは心配ごとを和らげてきました。

そんな歴史の中で生まれてきたのが、縄文人のアートとキッチンです。縄文人たちは、ナチュラルな素材をたくみにつかって髪や耳、首元や腕を飾り、その身を引き立てていました。煮炊きに使う土器にも細やかなテクニックで文様をあしらい、あるいは複雑で手間のかかる工程をふみながら、あざやかな漆塗りの器を作り上げていました。また、死や危険などへの不安を和らげるために、祈りの道具も生み出していました。

このようなアートにあふれたくらしを支えていたのは、豊かな森と水が育む自然のめぐみであり、それを生かす縄文人の知恵と工夫でした。縄文人は土器を使った煮炊きによって、食の安全性を高め、食べられる資源の種類や量を大幅に増やしていました。木の実の大量貯蔵によって、秋のめぐみをほかの季節でも利用できるようにし、丸木舟であちこちの資源利用へも出かけやすくしました。身近にないものは遠くの産地との流通・交換によって手に入れる仕組みもできていました。

米原市とその周辺の歴史・文化の特徴の１つは、以上のような現代への扉を開いた時代の知恵と工夫が総合的かつ良好な状態で残されていたところかもしれません。入江内湖遺跡や筑摩佃遺跡、六反田遺跡などをはじめとする市内と周辺の 40 数か所の縄文遺跡がそれをありありと象徴してくれています。

【参考文献】

磯山城遺跡（米原市）

1）米原町教育委員会 1986『磯山城遺跡』

入江内湖遺跡（米原市）

2）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007『入江内湖遺跡Ⅰ』

3）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2008『入江内湖遺跡Ⅱ』

筑摩佃遺跡（米原市）

4）米原町教育委員会 1989『一般国道８号（米原バイパス）関連遺跡試掘調査報告書』

六反田遺跡（彦根市）

5）滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013『六反田遺跡Ⅱ』

起し又遺跡（米原市）

6）伊吹町教育委員会 1998『起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

杉沢遺跡（米原市）

7）伊吹町教育委員会 1996『杉沢遺跡甕棺墓の調査・谷海道遺跡』

番の面遺跡（米原市）

8）米原市教育委員会 2008『番の面遺跡分布調査報告書』

粟津湖底遺跡（大津市）

9）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997『粟津湖底遺跡第３貝塚』

10）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000『粟津湖底遺跡自然流路』

弁天島遺跡（近江八幡市）

11）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2002『弁天島遺跡』

竜ケ崎Ａ遺跡（近江八幡市）

12）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『竜ケ崎Ａ遺跡』

相谷熊原遺跡（東近江市）

13）滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2014『相谷熊原遺跡Ⅰ』

弘川佃遺跡・弘川宮ノ下遺跡（高島市）

14）滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007『弘川佃遺跡・弘川宮ノ下遺跡』

その他

15）財団法人滋賀県文化財保護協会編 2010『縄文人の「エコロジーとエコノミー」（シリーズ近江の文化財 004 琵琶湖の貝塚・粟津湖底遺跡が語る秘密）

【写真提供】

★01・03・04・07～11・19～27・29～36・38～40・45～48・50～52・54～59・61～64：滋賀県

★05・06・12～18・60：米原市教育委員会

【その他画像の出典】

★02・37：上記参考文献２）

★21・28：財団法人滋賀県文化財保護協会編 2010『縄文人のエコロジーとエコノミー』（シリーズ近江の文化財 004 琵琶湖の貝塚・粟津湖底遺跡が語る秘密）イラスト：早田まな 作成

★42：富山県八尾町教育委員会 1985『長山遺跡発掘調査報告』

★43：柳原功一 2000「「土偶装飾付土器」について」『土偶研究の地平』４ 勉誠社

★上記以外：当協会瀬口撮影

滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅲ　米原市編２

縄文人のアートとキッチン

2021 年（令和３年）７月 22 日　発行

編集・発行　公益財団法人滋賀県文化財保護協会

〒520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2

TEL　077-548-9780　/　FAX　077-543-1525

会場：滋賀県埋蔵文化財センター

会期：2021 年７月 22 日～８月 31 日

主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

後援：滋賀県・米原市教育委員会